

夏目漱石

素人と黒人

素人と黒人

自分はこの平凡な題目の下に一種の芸術観ないし文芸観を述べたい。自分がなぜこんな陳腐な言葉ことばを拵えらんだかというに、普通の人の使っている素人しろうとと黒人くろうとという言葉には、だいぶの誤解が含まれている、したがってそれ芸術上に用いる時に、一種滑稽こっけいな響きを与える例が多いからである。

普通世間ではその道に堪能でないものを捉とらえて、あれは素人だと軽蔑けいべつする。それからその道に熟達したものを

指さして、あれは黒人だと尊敬する。そういわれるものもまた単にこの二つの言葉だけで自分の芸術上の位置が極きまるかのごとくに考えているらしい。たとえば絵画を何年か稽古けいこしたものは、世間から見れば黒人に違ちがいないので、この方面において普通のものよりも多く口を聞きく権利があるように振舞ふるって憚はばらないし、また絵筆を持つたこともないいわゆる素人は、そういう人の前へ出ると鼠ねずみが猫ねこの前へ出たように大人おとなしく控えている。これは世間が好いい加減かげんに極きめた素人と黒人という言葉に賊せられて、自分達たちの立場をよく分析してみない結果だろうと

思う。

自分は文芸上の作品について素人離れのしたそうして黒人染みないものがいちばん好いということをよく人に言った。今も時々同じ言葉を繰り返している。しかし素人と黒人という意味をもっと理知的に解釈するようになったのは、近ごろ諸所の展覧会で見た絵画（ことに日本画）が強い原因になっている。自分の考えは最初日本画のお手際に感心し、中ごろそのお手際の意義を疑い、仕舞しまいにそのお手際を軽蔑しはじめた時によろやく起ったのである。だから変化しつゝ継続した一種の感情の骨格のよ

うなものである。その骨格はむろん自分の作ったものではない。自然の感じの裏面を最初から組み立てていたりである。自分は自分の感じを剥いでその内部にある骨組を発見したにすぎない。

自分がこの骨組を点検している時に、思い掛けない二人の芸術家が自分を訪ねた。その二人とも一般からは芸術家とは呼ばれずに、同じ意味ではあるが一種好くない連想を有った芸人として取り扱われている男達であった。彼等は自分の専門とはきわめて縁の近そうで、そうしてほとんど交渉のない方面に働らいている人々であつ

た。

一言でいうと、彼等は舞台の人すなわち俳優なのである。自分は世俗の習慣に従って、こゝに彼等を菊五郎、吉右衛門と呼び捨てにする自由を有ちたいと思う。

菊五郎に会ったのは去年の十一月末であった。その時は紹介者として長谷川時雨女史も見えた。用談は新しく狂言座という団体を作つて芸術上の研究をするから賛成者になってくれという依頼であった。芝居に不案内な自分にとって、これほど案外な用件はなかった。しかし自分は今いうとおり素人と黒人という問題を考えている

際であつたので、つい菊五郎に向つて、私は芝居むかにかけてはまったくの野蛮人だが、野蛮人の立場からなら、あるいは批評ができるかもしれなひと言つた。すると菊五郎はぜひそれが聞きたいと答えた。自分はまた、野蛮人の批評は土台から野蛮的なものだから。懇意にならない以上は遣やり悪にくいと言つた。すると時雨女史が懇意になつて野蛮的に遣つてもらいたいと言いだした。劇評家などになる考かんがえの毛頭もうとうない自分は少し言ひすぎたのである。しかし自分から野蛮人の批評を求めようとする彼等にも野蛮の二字はおそらく徹底的に理解されなかつたろうと思

う。

狂言座という団体は日本人の作った新らしい社会劇でも遣る有志者の集りだろうと早合点はやがてんした自分は、菊五郎に素人になれるかと聞いた。今の世は素人が書をかき、画えを描かく時代だと言った。素人が小説を作る時代だと言った。なぜといえは芸がこれ等を遣るのではない、人間が遣るのだからと言った。しかし自分の言ったことは、あ
るいは菊五郎に通じなかつたかもしれぬ。

吉右衛門の来たのはそれから三週間ほど経たった十二月下旬のことである。この時は小宮君が同伴であつた。自

分と小宮君とは遠慮のないあいだから間柄だから、初対面の吉右衛門を前に置いても思うような話が出来た。自分は日本の歌舞伎芝居かぶきしばいというものを容赦なく攻撃した。それに深い興味を有ことっている小宮君の弁護のうちには、自分と全然立場を異ことにしている根拠からくるものが多かった。自分は笑った。そういう点になると、この道に親しみの深い彼よりも、門外漢の自分の評価のほうがかえってたしかであるとして主張した。小宮君は納得しなかった。自分は幕府を倒した薩長さつちようの田舎侍いなかむらひが、どのくらい旗本はたもとよりも野蛮であったか考えてみると言った。そんな弁護をす

る人はあたかも上野^{うえの}へ立て籠^{こも}って官軍に抵抗した彰義^{しょうぎ}隊^{たい}のようなものだと言った。ローマを亡^{ほろ}ぼしたものは要するに野蛮人じゃないかとも言った。

吉右衛門の来訪は菊五郎のように自分の署名調印を貰^{もら}う目的でもなんでもなかった。しかし彼は新らしい脚本を要求しているらしかった。自分の書いたものを遣^やつてみたいというようなことも口へ出して言った。もつともこれはよほどまえから小宮君が自分に対する要求の一つであった。脚本を書く興味の深く乗らない自分は、そのうち書けたら書こうとばかり答えて今日に及んだのである。

る。

二人ふたりの俳優が自分の宅うちへ来たのは素人と黒人の講釈を聞かためでもなんでもなかつたのである。けれども自分は自分と彼等との立場の比較やら、自分の芸術に対する考えやらが頭のなかにあつたので、つい当面の用談に關連して、素人と黒人の問題を彼等に向けたのである。しかも解わかりにくい断片的な形式を通して向けたのである。自分は自分の思想の影が明らかに彼等の脳裏そばに映らなかつたことを知っている。現に菊五郎の来た時そばに居い合あせた画を専門にする自分の友達は、彼の歸つたあとで、あ

あなたの言ったことはよく通じなかつたらしいですねと自分に告げた。しかし自分を理解してくれるこの画家に感謝しただけで、自分の心は満足しえなかつた。有望な二人の青年俳優に対する責任としてのみでなく、自分の頭に対する責任として、この問題をもっと明瞭めいりょうにもっと組織的に表現しなければ済すまないような気がどこかにあった。そうして自分は今その機会を捉とらえたのである。

素人と黒人の優劣は、この二つの言葉を普通の応用区域すなわち芸術界から解放して、漫然と人間のうえに加えてみると存外はつきりするものである。世間ではある

女を評してあれは黒人だといったり、あれは素人だと言ったりしている。この裏に含まれている褒貶ほうへんの意義は品評者の随意としても、この二つの言葉によって代表される事実はほとんど争う余地のないほど明白である。

黒人は第一人付ひとづきが好い。愛想あいそがある。気が利きいている。交際上手じょううずで、相手を外そとさない。数え立てればまだいくらでもあるだろう。しかしいくらあっても、その特色はついに人間の外部に色彩を添える装飾物についてのみ言えることだけである。いくら調べていくら研究しても、その特色が人格の領分に切り込むことはほとんどないので

ある。まして粘神の核に触れるなどという深さは、夢にも予期することができないのである。

黒人は次に着物の着こなし方が旨い。それから化粧方がすこぶる上手である。頭のもので穿物でも自然と粹いきにできている。これ等も彼等の特色として著いちじるしく他の注目を惹ひく点に違ちがい。けれどもそれはまえに述べた特色よりも、なお人間の上側うわがわに付着するものである。様子の好きな人だとか悪い女だとかいう言葉は、その様子が精神そのものの表現と見倣みなすことのできない場合でも、とにかく生きてきた人間の一部分を代表するものとして、

一般的にも哲学的にも、認められて差さ支しないと思おもうが、
 着物おしろいや白粉くしや櫛げや下駄たにいたると、どうしたって取とつて
 喰くつ付つけたものである。もとより精神や肉体に關係がな
 いと断言するのは悪いかもしれない。しかし両者に縁えんの
 ない遠い所から来て、かりに身体からだに付着しているのだか
 ら、いかに自分の一部分であるかのごとく装まっているに
 しても、いつ切り離されるか解とらないという意味から見
 て、自分とは甚はなはだしく懸かけ隔かったものである。いくら朴ほ
 の木炭きずみで磨みがいても、鶯うぐいすの糞ふんで洗せんっても、頬骨ほおぼねの高いの
 や額ぬかの出たのは決して改良かできないのが好このい証し拠拠であ

る。

してみると俗にいう黒人の特色というものは、人間の本体や実質とは関係の少い上面うわつらだけを得意はいかいに徘徊はいかいしているように思われる。この事実をもう少し念を入れて眺めながていると、一見人を引き付ける魅力をもった黒人というものが、存外つま詰らなく見えてくる。彼等の特色は彼等に固有のものではない、誰だれでも真似まねのできる共有的なものだという気になる。必要なのは練習とお浚さらいだけで、そのほかほとんどなんにも要いらないということが解る。要するに黒人の誇りは単に技巧の二字に帰着してしまう。

そうしてそんな技巧はたいがいの人^{こんき}が根気よく^{でっち}丁稚奉公
 さえすれば^{ぞうさ}雑作なく達せられるものであるという心持に
 なる。上部^{うわべ}だけの改良で事が済むのだから、精神的の教
 養よりもはるかに容易である、容易であるから誰にでも
 達せられると言うのである。

自分はこゝに挙げて祈^い願^{ねが}した黒人の特色を、絵画の黒
 人にも、俳優の黒人にも、ないしは文芸の黒人（もし文
 芸に黒人があるとすれば）にも、応用したい。そうして
 彼等に向つて、単に黒人であるというこ^ことは、あまり威張^{いば}
 れたものでないという気の毒な事実を告げたい。素人で

も尊敬すべきだという真理を首肯うけがさせたい。腕は芸術のすべてではない、むしろ芸術界に低級な位置を占めるのが腕である^{かげ}と教えたい。いな、多くの場合に黒人はこの腕のお陰で、芸術を破壊する、墮落させる、向上の邪魔じゃまをされている、と主張したい。黒人はこれ等の特色さえ發揮すればそれで十分だと思ふなら、人間は権謀術数けんぼうじゆつすうさえ練習すればそれで沢山たくさんだと考えるところと同じである。誰が権謀術数だけで人間になれると思ふか。人間は権謀術数よりももう少し高いものである。

良寛りょうかん上人しょうにんは嫌きらいなものの中に詩人の詩と書家の書

を平生から数えていた。詩人の詩、書家の書といえ、
 本職という意味から見て、これほど立派りっぱなものはないは
 ずである。それを嫌う上人の見地は、黒人の臭においを悪にくむ
 純粹でナイーブな素人の品格から出ている。心の純なる
 ところ、氣の精なるあたり、そこに摺すれ枯からしにならない
 い素人の尊とうとさが潜ひそんでいる。腹むなの空しくせに腕うでで搔か
 き回まわしている悪辣あくらつがない。器用いきようのようである。実は大人おとなら
 しい稚氣ちいきに充みちた厭味いやみがない。だから素人は拙ちやくを隠かくす技
 巧こうを有ありないだけでも黒人より増ましだと言いわなければな
 らない。自己には真面目まじめに表現ひょうげんの要求ようきうがあるということ

が、芸術の本体を構成する第一の資格である。すでにこの資格を頭の裡うちに認めながら、なおかつ黒人の特色を羨うらやむものは、君子の品性を与えられているくせに、手練手管てれんてくだの修業をしなければ一人前でないと悲観するようなものである。

自分は俗間で婦人だけについて用いる黒人という言葉から川立した。その言葉か解剖してみると、毫ごうも内容を改めないで、そのまま、芸術上の専門家に応用ができたのである。そうしてその結論は芸術界のいわゆる黒人に対して気の毒なものになってしまったのである。彼等をして

自分の説をなるほど首肯わしめるにはこれで十分だと自分は考えている。

しかし念のためだから、しばらく今までの局面を一掃して、さらに新らしいところから黒人と素人を比較してみようと思う。あるものを観察する場合に、まず第一にわが目に入るはいるのはその輪郭である。次にはその局部である。次には局部のまた局部である。観察や研究の時間が長ければ長いほど、だんく細かいところが目に入ってくる、ますますく小さい点に気が付いてくる。これはすべての物に対する我々の態度であって、ほとんど例外を許

さなほど応用の広い自然の順序と見ても差しさ支つかえない。だから芸術の研究も、またこの階段を追って進んで行くに違ない。いわゆる黒人というものはこの道を素人より先へ通り越したものである。そうしてそこに彼等の自負が潜んでゐるらしい。彼等の素人に対する軽蔑の念も、またそこから湧わいて出るらしい。けれどもそれは彼等が彼等の径路を誤解して評価づけた結果にすぎないと、自分はは断言して憚はばからない。彼等の径路は単に大から小に移りつゝ進んだのである。浅い所から深い所に達しつゝあるのでもなければ、上部から内部に（立体的に）突き

込んで行きつゝあるのでもない。大通りを見尽したから裏通りを見る、裏通りを歩き終ったから、横丁や露路を一つく覗のぞいているという順序なら、たとい泥板どぶいたの上を一軒々々数えて回つても、研究の性質に変化のくるはずがない。それを低い平面から高い平面に移されたように思うのは、いわゆる黒人のイリユージョンで、平凡な黒人はみなこのイリユージョンに酔わされているのである。単にこれだけなら彼等の芸術に及ぼす害毒はさほど大したものでもないかもしれぬ。けれども彼等はこの甘いイリユージョンに欺かれて、大事なものはどこかへ振

り落して気が付かずにいるのである。

観察が輪郭に始まって漸々だんだん局部に移って行くという意

味を別の言葉で現あらわすと、観察が輪郭を離れてしまふと

いうことに帰着する。離れるのは忘れる方面へ一步近寄るのと同然である。しかもその局部に注ぐ熱心が強ければ強いほど輪郭の観念は頭を去るわけである。だから黒人は局部に明るいくせに大体を眼中に置かない変人に化かてくる。そうして彼等の得意に避つて退のける改良とか工く夫ふうというものはことごとく部分的である。そうしてその部分的の改良なり工夫なりが毫も全休に響いていない場

合が多い。大きな目で見るとなんのためにあんな所に苦心して喜んでいるのか気の知れない小刀細工こがたなざいくをするのである。素人は馬鹿々々ばかばかしいと思っても、先が黒人だと遠慮してなにも言わない。すると黒人はますます増長してたゞ細かく細かくと切り込んで行く。それで自分は立派に進歩したものと考えるらしい。高い立場から見下すみおろと、これは進歩でなくって、墮落である。根本義を棚たなへ上げておいて、末節にばかり齷齪あくせくする自分の態度に気がついたら黒人自身もしか認めなければなるまい。

素人はもとより部分的の研究なり観察に欠けている。

その代り大きな輪郭に対しての第一印象は、この輪郭のなかで金魚のようにあぶく浮いている黒人よりは、あざやかに把捉できる。黒人のように細かい鋭どさは得られないかもしれない、ある芸術全体を一目ひとめに握る力において、糜爛びらんした黒人の眸ひとみよりもたしかに澆刺はつちつとしている。富士山の全休は富士を離れた時にのみはつきりと眺められるのである。

ある芸術の門を潜くぐる刹那せつなに、この危険はすでにその芸術家の頭に落ちかゝっている。虚心に門を潜くぐってさえそうである。与えられた輪郭を是認して、これは破れない

ものだと観念した以上、彼の仕事の自由はとうてい毫釐ごうりの間をうろついているにすぎない。だから在来の型や法則を土台にして成立している保守的の芸術になると、個人の自由はほとんど殺されている。その覚悟でなければはいるわけにゆかない。能でも踊おどりでも守旧派の絵画でもみんなそうである。こういう芸術になると、当初から輪郭は神聖にして犯すべからずという約束の下もとに成立するのだから、そのなかに活動する芸術家は、たとえ輪郭を忘れないでも、忘れたと同じ結果に陥って、たゞ五十歩百歩の間で己おのれの自由を見せようと苦心するだけであ

る。素人の目は、この方面においても、一目の下に芸術の全景を受け入れるという意味からみて、黒人に優まさっている。

こうなると俗にいう黒人と素人の位置が自然転倒しなければならぬ。素人が偉くって黒人が詰つまらない。ちよつと聞くと不可解なパラドックスではあるが、そういう見地から一般の歴史を眺めて見ると、これはむしろ当然のようでもある。昔から大きな芸術家は守成者であるよりも多く創業者である。創業者である以上、その人は黒人でなくって素人でなければならぬ。人の立てた門を

潜るのでなくって、自分が新しく門を立てる以上、純然たる素人でなければならぬのである。

自分はまだ言うべきことがたくさん残っているように思うけれども、急いでこの稿を書き上げなければならぬい事情があるので、これだけにしてひとまず筆を措くことにする。ここにいう黒人というのは、むろんたゞの黒人を指すので、素人というのは芸術的傾向を帯びた普通の人間をいうのである。偉い黒人になれば局部に明らかなど同時に輪郭も頭に入れているはずであるし、詰らない素人になれば局部も輪郭も滅茶々々めちやめちやで解らないのだか

ら、そんな人々は自分の諭つうじんずるかぎりではないのである。
それから俗にいう通人つうじんというのは黒人の馬鹿なのよりも
ずっと馬鹿なのだから、これも評論のかぎりでないこと
を断っておきたい。

(大正三・一・七一―一二)

日本文学電子図書館

素人と黒人

著 者 夏目漱石

制作者 宮澤一郎

底 本 「漱石全集 第11巻」角川書店

昭和42年7月30日 7版発行

日本文学電子図書館